

## 狩野先生を悼む

久野秀男

先生に最後にお目にかかったのは5月24日でした。小半時ほどで病室を退出し、研究室に立ち戻って雑用を片付けておりましたところ、俄かにご逝去の報に接し誠に信じ難い思いでありました。

「年命はまさに朝露の如し」と申しますが、古稀に達した小生が、未だ六十路も半の先生に先立たれるとは、夢想だにしなかったことです。

わが「経済学部」が当時の「政経学部」から分離・独立した頃、当時新進の原価計算研究者であられた先生を、東洋大学からお招きしてこの方およそ30年間、精力的に研究を継続され、熱心に学生を教育され、また、一時期には院の行政面でも理事・常務理事としてご尽力されました。

経済学部ご就任に際して、小生が拝見した「論文」は「銀行原価計算」に関するもので、この命題は、極めて有意義かつ重要なものであったにもかかわらず、昭和初期の金融恐慌時に僅かに研究の萌芽がみられましたが、せいぜい「預金コストの分析」程度の幼稚なもので、しかもその後は永らく等閑に付されて来ました。先生のこの時期の諸論文は、そのレベルは格段に高度であり、また、極めて「先見性」に富んだものでありました。

爾来、原価計算全般についての研究をすすめられ、「工業会計」の樹立に努力されましたが、さらに近年は、「管理会計」の領域をも意欲的に展開されておりました。

平成6年6月2日の「日本会計研究学会・第53回大会」において、特別委員会は「原価企画研究の課題」を発表しましたが、この研究領域は、「原価会計」と「管理会計」との学際領域にあるもので、まさしく先生が志向され、ご研究を精力的に続けられてきたものでありますから、極く近い将来、この新分野のリーダーとしてご活躍になったことと推量いたします。先端的なこの分野の研究の業半ばで急逝されましたことは、当大学にとっても学界にとっても、誠に痛恨事であります。重要な研究領域であるにもかかわらず、会計学者の中での専門研究者の数が他の領域に比べて格段に少ないこの研究領域で、先生に比肩出来る程の研究者を得ることは、誠に至難の技といわねばなりません。

謹んで衷心より哀悼の誠をささげ、あわせてご生前の業績に敬意を表する次第です。